

「デジタル化の前に『文章力』を鍛えるべきだ」。新聞記者OBで現役時代は新聞のデジタル化に取り組んできた坪田知己さん(63)は、定年退職後、各地で文章講座を開いて、ネットの文章の「共感度」を上げる取り組みをしている。

2011年初め、テレビ局のディレクターから、「文章の書き方を学校で教えないのは日本だけ」という話を聞き、経験を生かして「文章術」を開発しようと考えたという。

昨年2月、東京都杉並区で商店街の活性化に取り組む育児休暇中のママのグループに頼まれ、文章を教えた。最終課題は店主のインタビュー。その出来が素晴らしかったので、5月に地域新聞「わだっち」を創刊したところ大

シニア デジタル達人伝

ネット時代の文章力



文章講座を開く横浜市の街カフェ「ミエル」で世話人を務めるオーナーと打ち合わせする坪田知己さん(右)

評判になった。店主の商品へのこだわり、お客への思いやり、これまでの苦労がリアルに伝わり、チラシやフリーペーパーでは分からなかった「心の声」が伝わったのだ。杉並区が補助金を出し、11月には「和田商店街ウェブサイト」が開設された。目玉は商店の紹介記事だ。

4月からは、横浜・大倉山の街カフェ「ミエル」でも文章講座を開いている。「大倉山おへそ」というホームページがスタートし、商店の紹介をアップする計画だ。また京都・宇治の地域SNS「お茶っ人」のメンバー、神奈川県・茅ヶ崎の市民活動のグループにも文章を教え、高校生から

84歳の男性まで、150人が受講した。今年も全国各地から招請されている。坪田さんは「ITは手段。心が伝わらなければ、宝の持ち腐れ」という。ネット時代にフィットした「明快・簡潔、共感される、リズム感がある」が「坪田流文章術」のキモだ。岡山市内で暮らす母親(88)を遠距離介護しながら、全国を駆け巡る坪田さん。内閣府の地域活性化伝道師であり、最も人気のある総務省地域情報化アドバイザーでもある。(老テク研究会事務局長・近藤則子)

記者OBが講座開き指導

◇ 和田商店街ウェブサイト
は「<http://wada-shoten-kaijindo.com/>」。